

頼桃三郎先生著「近世文壇史話詩人の手紙」付タリ「十菊随筆」賛

横 山 邦 治

頼桃三郎先生、広島大学を停年退職されるを記念して、「詩人の手紙」なる論著を上梓さる。時に、昭和四十九年八月十日、発行書肆は、安芸の国、広島市なる「文化評論出版株式会社」。菊判B六、布張紺表紙、装幀瀟洒にして滋味掬すべしとも評すべきか。題簽「詩人乃手紙」の文字、先生自身の筆になるか、肅然として独歩の風格を現す。

「緒言」を見る。

近世時における「文壇」と「詩人」の語の、現今におけるといかに異なるかを定義されるときに、その語の近世的定着時を「江戸中期」という語で特定される。この「江戸中期」というのは、具体的には、享保改革後より文化・文政に至る間を指されるごとくである。年号を列挙すれば、享保・元文・寛保・延享・寛延・宝暦・明和・安永・天明・寛政・享和を経て化政の盛時に至る、大約一世紀に

近き期間である。一般に、江戸時代を元禄と化政の盛時を中心に前後期に分けるに對して、「江戸中期」なる語で、近世時のこの時代を特定されるところ、先生の近世文学に對する深い洞察と鋭い分析を知るべきである。

「江戸中期」なる特定せられた時代の文学をいえば、近世時においてもつとも多彩、敢えて一言に尽せば、一方に戯作なる呼称で特定される一群、他方に詩苑とでも呼ぶべき一群のあるは周知の事実である。而して、この硬軟両極の文学は、各自論あるものの、まずは同一の土壌に生を享けたものであった。当然、硬を説く人は軟を知り、軟を説く人は硬を知るの要がある。その両様を兼ね備えたる人、極めて稀なること喋々するまでもない。知る人ぞ知る、頼先生は、その稀なる人の唯一人者である。而して、先生の論は、硬の極たる寛政朱子学再興の主導者頼春水の文事を中心に展開されるごとくである。けだし、頼三兄弟の仲弟春風を高祖に持たれる先生なれば、必然。

第一章は、「明和・安永の上方文壇」と題される。

まず、春水の「霞閣掌録」に見られる秋成伝の聞き書きの紹介から始まる。この聞き書き（秋成が「江戸御旗元一名家ノ孫ナリ」という）の真偽については、「其父ノ遊蕩セシハ其少年ノ時ナレバ合セテ百年モ前」のこと、その確実性については今しばらくおくとして、春水が混沌社の同人として交遊した阪文人の一群を、彼の「在津紀事」に拠って詳細に紹介されると、この聞き書きも当代文人間の生きた伝聞として精彩を帯びてくるのである。

次いで、若冠十九才の春水が、明和元年始めて上阪した時の記録「東遊雜記」を紹介される。「東遊雜記」冒頭七葉を占めるといふ「京阪文人の姓名住所録」を見ると、竹原という海辺の町に生を享けた感慨満々たる秀抜の才子春水の面影が彷彿すると同時に、上方文壇の実状と地方知識人士との交流の在り様がうかがえるのである。恐らくは、享保前後から顕著に見られる、幕初以来上方中心に營為された文事が漸次崩れ去り、一般に文運東漸と称せられる現象、実は文事が日本全国共通のものとして云々されるに至る現象が、平賀中南を始めとする多くの指南があったとはいえず、秀抜なりといえど一介の田舎漢たる春水にもこれ丈の著名文士人の名前を列挙訪問させることを可能ならしめたのであろう。而して、この上阪を機に彼春水が、「日本詩史」の著者にして混沌詩社の盟主江村北海の知遇を得しならんと推される。春水の行動をもとに、やがて上方文壇の実態が浮き彫りされるのである。

江村北海・薮孤山・葛子琴・隠岐秀明・尾藤孝章などの春水・春風宛の書簡の解説を通して、明和・安永の上方文壇の実態に触れら

れるのが、「詩人の手紙」(一)・(二)である。我々は、先生の手引きによつて、この期の上方文壇の息吹きを体感すればよい。再録するを許されれば、「在津紀事」の一節を示そう。

○友人門生毎送余帰省至於郭外。一歳子琴專介（非元知）至大仁村表飯亭而別。日歸日如可期。當復迎于此。余日以吾常例則大率為某日。乃別。已而東還。沿途知旧要遮者隨宜辭去。抵明石乃念略可踐約。抵尼崎巽渡。津法尽日而輟。余迫暮呼而渡之。入大仁則夜矣。過表飯亭訪問。果有數客即子琴專介及二三塾生也。驚而相賀。子琴勸其所釀酒。送返僑居。亦一快事。

先生は、この一節から「菊花の約」を連想される。怪異譚として説かれかねない「菊花の約」を、時代の好尚という背景を設定することでその現実感覚を的確に明示される爛眼に三嘆する。先生の中因白話小説に対する造詣の深さは周知のこと。しかしながら、それから生まれた近世中期怪異小説における読みの深さも、こうした現実感覚に支えられてこそ清新であることを銘記せずばなるまい。

## 二

第二章は、「頼家三兄弟」と題される。

「歌人彦文と春水」においては、熊本藩儒員辛島塩井の書簡を紹介して、晩年の春水の動向と、水俣に客死せる竹原出自の歌人道工彦文の事蹟を深らんとする春水の動きを提示して、安芸と肥後の文壇人の交流をも視野に収め、「杏坪自伝「老のくりこと」」において、新井白石の「折たく柴の記」を念頭に綴られたとされる頼杏坪の自伝「老のくりこと」を紹介しつつ、春水に従って醇儒たりし杏坪が吏となりし生涯をたどり、「春風の長崎旅行」においては、原

題「森鷗外『伊沢蘭軒』伝補遺」が示すごとく、文化四年の春風の九州旅行の記録「適肥」などを材に伊沢伝の、長崎滞留中の記事を補わんとされたものである。近時、「市河米庵と長崎」（国語国文論集・第5号）において、長崎に於ける文人の動静について、論を添加された、長崎の、天下の文人史伝に新しい展望を与えられるのである。それぞれ、事実在即した記述によって当代の文士人の生熊が躍如となる、而して多く江戸・上方に偏して記述される近世文壇の在り様が、真実、その姿を現わすのである。

かつて中村幸彦先生が、座談でもっとも典型的にして好もしき儒者として頼香坪の名を挙げられ、推称して止まらなかったことがある。今も、三次周辺の故地を訪れば、代官たりし香坪の事蹟を称賛する衆庶の声を聞く。「老のくりこと」の紹介により、寛政の三博士の一人春水の手足たりし万四郎頼香坪が、朱学の理想を実現せんとして敗れ去る姿を描出される、その先生の微細にわたる筆は、香坪の智と情の斐々の深奥を、共感をもって探り求めて余す所なしといえた。「春草堂詩鈔」の詩一編を、先生の鑿みに倣って再録し、有能にして善意の人香坪の晩年における肅殺の氣を感得し、時流に抗し得ぬ人間の悲愁を味読しよう。

○旧府山河秋色深。 況逢九日更肅森。  
郡無政績違初志。 固有災傷痛老心。

### 三

第三章は、鷗外「伊沢蘭軒」伝補注と題される。

鷗外は、史伝小説「伊沢蘭軒」その十三において、頼山陽が寛政九年四月から一年間江戸滞在中、伊沢氏の口碑として、山陽は江戸

にある間に伊沢氏に寓し、又狩谷椋齋の家にも寓した、と伝えられていることをいい、山陽江戸滞在中の行状不羈なりし証ともする。

この鷗外説に対して、「伊沢蘭軒」補注の形で、山陽の江戸留学、千蔵行状記、千蔵の江戸生活の三章にわたって、真説を確実な資料に拠って提示される。山陽の不行跡については、香坪自筆紙片に、新宿遊所にて衣服質物に致置候云々とあり、否定できぬことながら（物堅き頼家にとつては特記すべきも、まずは若気の至りにてという程のところか）、伊沢家もしくは狩谷家流寓の実証なきを説き、鷗外の伝にも出てくる頼千蔵なる人物との誤伝かとされ、その行実を明らかにされる。

春水の父又十郎の弟伝五郎一子千蔵は、頼家本来の家業紺屋を続ける責務ありながら、改業遊学の志止むことなく江戸遊学、伊沢・狩谷両家引受け、駒込辺に居を定め売講貧書生の苦難を経て、春水没後広島に於て少々の門戸を張ったかとされる、茶山の春風宛書簡に見られる千蔵評「如仰御兄弟に比すれば才具は乏しく略一しかし他家の子弟に比すれば拔群之ことに御座候」というに、千蔵の悲運があるごとくである。この悲運の才子千蔵の行実を、哀惜の筆をもって活写される、千蔵の江戸生活は、鷗外の史伝読誦中の感さえあるのである。

とはいえ、先生の真意は伝補注にのみあるのではあるまい。山陽自身が評して「這翁中一筋に而行ぬ人に而」という茶山の香坪宛書簡の紹介などに、先生の意図されるものを披み取るべきであろうか。一読三嘆、「近世・近代のことばと文学」編集の際、原稿をいただいで、徹宵耽読したことを想起するのである。「緒言」において、人々の手紙を載断しつなげる遊びといわれる。鷗外さん

も読みとる自信がないという（「伊沢蘭軒」その十五）当代一流の文士人の書簡文書を、正確に読み下して、それを再構築していく遊びがいかなるものかは、儒学に聞く詩文を解し得ざる我々に窺知し得ざるところである。遊びの高さを賛仰するのみ。

#### 四

第四章は、「風律札記」と題される。

広島の人多賀庵風律と頼家との交渉を、風律の弟子凡十や風律自身の書簡、春水の旅行記「引翼余編」などを駆使して明らかにしていられる。緒言に説かれるごとく、文人社会と俳諧の在り様に筆が及ぶ、得てして研究者に多く見られる専門を遵守する視野の狭さに対する警告としよう。地方俳壇の研究者下垣内和人氏の業績にも触れられるが、近世文芸研究が俳壇とか文壇とかの垣を超越した文事の研究に展開されなくてはならないことを証されるのである。

巻末に、細字で、七編の付録資料を紹介される。春水・春風・杏坪三兄弟と千蔵および春風の子で春水の養嗣子、文化十二年廿六才で夭折した景讓の「西帰雜記」を含む、詩稿を中心とした各種の新材料である。

漢字にうとく、いまだ味読するに至らないが、枕頭に備えて近世中期の文人たちの営為を体感すべき好資料であった。

#### 五

頼桃三郎先生に、「十菊隨筆」なる隨筆集がある。昭和二十八年より十年間、三原付属校長・園長を勤められた先生の下で共に学ばれた先生方が、頼先生の好文章を愛惜して上梓されたもの、発行所は「頼桃三郎顕彰委員会」とある。

三原付属P・T・A会報所載の「P・T・A雜記」を巻首に、創作童話二編を含めて長短七十一編の文集である。その内容は、巻頭野地酒家先生の序の礼賛に尽きる、文趣を解し得ざる朴念仁の喋々するは冒瀆である。想の雅趣・文の高雅・学の博雅、野地先生の説

かれるごとし、論著「詩人の手紙」において和漢の学に通暁されたことを示される先生は、「十菊隨筆」において和漢洋の学を体得されたるを示される。而して、私自身、一章一節に微笑・微笑・微笑・快笑したことを白状せねばならぬ。所評、下腕のやからなれば、とお叱りを受けようが、例えば「十菊隨筆」の各篇など、七メンドウな顔してはどうしても読めませんでした。こうした快い笑いは、本当に久しぶりに体験しました。エスプリのきいた先生の座談の妙を思い出すのです。

「詩人の手紙」「十菊隨筆」、ともに出版されて一年に垂んとするが、地方新聞紙上に一度短文の紹介を見しのみ。

短見によれば、頼先生の心友水野稔先生の「江戸小説論叢」（中央公論社・昭和四十九年十一月三十日発行）と、中村幸彦先生の「近世文芸思潮」（岩波書店・昭和五十年二月二十八日発行）とともに、頼先生の「詩人の手紙」は、近來の近世文芸研究の三大収穫の一である。人ありて或いはいう、先生には地の利あり、当然の果実なりと。然し、それは短見の誇りを免れない。先生の学識ありて、始めて地の利も生かし得るのである。緒言で「私はやと五十歳に近くなつたころ、始めて儒者文人の真相にふれる思いがした」と述懐される先生のそれまでの学の堆積こそ大切なのである。地下にねむる頼家三兄弟をはじめ景讓・千蔵も、先生の学あって始めて近代に甦ったのである。

而して、魁棋一氏によって、家学は継承される。先生、いよいよ健在、広島に近世文芸研究を志す後学を誘掖されんことを。

（頼先生の御高著に言及する任にあらざること重々承知の上で、この一文を草した。いまだ、先生のこの名著を云々する言を知らないからである。とはいえず、書評する学識なく、紹介するには読み解き得ぬ文の多きをいかにせんとして、賛という。盲目蛇に怖じざる言乞御寛恕を。）